

Masako K. Hiraga (平賀正子 著)

Metaphor and Iconicity: A Cognitive Approach to Analysing Texts.

(メタファーと類像性：認知論的テキスト分析)

(Palgrave Macmillan (マックミラン出版社)、2005 年、A4 判、261 頁、£ 50.⁰⁰)

小山 亘

本書は、本誌を編集・発行している立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科で教鞭をとり、記号論、認知言語学、語用論、そして応用言語学を専門とする研究者である平賀教授によって執筆されたものである。そうであるならば、本書の書評を始めるにあたり、次のように問うてみたい。すなわち、ことばと、文化、そしてコミュニケーションは、どのように切り結ぶのだろうか。ことばを専門的に研究する学問は「言語学」とよばれるが、言語学では、この問題はどのように扱われてきたのだろうか。そして近現代の言語学者たちが、この問題に与えてきた答えは、異文化コミュニケーション学を学ぶ者にとって、満足のいくものであったのだろうか。

多くの社会学者や哲学者たちが指摘してきたように、19 世紀は専門化の時代であった。社会全体がそうであっただけでなく、学問も、この時代に専門化が進行し、その結果、現在私たちが知っているような人間科学、例えば、心理学、社会学、文化人類学、そして言語学が、19 世紀末から 20 世紀の初頭にかけて成立する。つまり、それ以前は、思想家や文献学者などによって、文化、文芸、歴史、人間などととも研究されていた「ことば」は、この時期に、他から切り離されて、「言語学」という一つの専門的な学問によって研究されるようになった。言い換えれば、ことばを、それを取り巻く環境、コンテキスト（社会、文化、文芸、歴史、人間、心）から切り離すことにより、近現代の言語学は成立したのである。したがって、そのような学問においては、ことばは、文化やコミュニケーションや文芸や人間とは周縁的にしか関係性をもたないものと見なされがちであった。とくに、1970 年代まで言語学の主流派であった「形式主義者」とよばれる文法学者たちによっては、

しかし「ことば」は文法などの形式的な規則性以上のものである。だから専門的な「言語学者」以外の人々は、ことばを、文化、宇宙観（自然観）、認識、心理、行為、文芸などとの関係において考え続けたのである。たとえそのような研究が、専門的な学者たちによって無視されたり、非科学的であると難じられたり、あるいは「言語学の外部」とであるとして見下されたりしたとしても。そのような「言語学の外部者たち」に、言語学の周縁に位置する言語人類学の、そのまた周縁にいて、ことばを、文化、宇宙観、認識、心理との関係でとらえ続けた「アマチュア学者」、ベンジャミン・ウォーフ（1897-1941）がいる。そして、「失われた世代」に属し、ニュー・イングランドのトランセンデンタリズムの影響が濃かったウォーフの半世紀前には、同じくニュー・

イングランドの学者で、ハーヴァードの周辺で孤立しながら、頑固に自らの宇宙論を思念し続けた哲学者、パース（1839-1914）がいた。「記号論」とよばれるパースの壮大な哲学の体系では、ことばは、「人間による世界の認識」という問題領域の中に位置づけられ、そして人間の世界認識は、人間の行為や生命の目的という枠組みの中へと基礎づけられていた。パースの記号論は、そのあまりにも大きく宇宙論的な体系性のためもあり、専門化を特徴とする近現代科学の周辺にとどまり続けることになる。しかしパースの記号論は、ロシア・アヴァンギャルドの詩人、フォルマリストの文学者、そして同時に言語学者であったロマン・ヤコブソン（1896-1982）によって発見され、そしてヤコブソンは、記号論を基礎に、ソシュール（1857-1913）以降の現代構造主義言語学を立て直すことに成功する。こうして1950年代のハーヴァードで、ヤコブソンによって、「ことば」と言語学は、文法というくびき輓から解き放たれ、詩学、文芸、美学、行為論、出来事論、認識論と再び結ばれることになった。

しかし壮大なパースの体系に依拠し、文法、詩、言語行為などを横断的に取り扱うヤコブソンの記号論は、言語学者としてのヤコブソンの、アメリカにおける多大な影響力にもかかわらず、彼の多くの弟子たちによってさえ、「言語学の外部」にあるものと位置づけられたのである。例えば、ヤコブソンの弟子であったモリス・ハレ（1923-）は、チョムスキー（1928-）と共に1960年代のアメリカ言語学を席捲する「生成文法」学派を率いたのであるが、彼らの理論は、新ブルームフィールド学派以来のアメリカ形式主義言語学の枠組みを出るものではない。確かに彼らは「ことば」と「心」との関係について語ってはいたのだが、そこでは「ことば」は文法に、そして「心」は合理的思考に収束し、詩、行為、出来事、世界認識、文化、宇宙観（自然観）などの記号論的事象は、彼らの言語学・心理言語学から排除されていた。

だが「ことば」は文法や合理的思考以上のものである。だから、専門的な、形式主義的な「言語学者」以外の人々は、ことばを、文化、宇宙観、認識、心理、行為、文芸などとの関係において、思索し続けるのだ。そしてチョムスキーの弟子たちの内、「生成意味論者」とよばれた人たちは、文法や論理が、ことばのすべてではないことを、そして合理的思考が心のすべてではないことを、再び見いだした。そのような生成意味論者の一人がジョージ・レイコフ（1941-）であり、彼は、1970年代中葉に、言語学をゲシュタルト心理学に接合して「ゲシュタルト言語学」を旗揚げした。これがやがて、ことばをメタファーや範疇化などの概念的な心理過程や、人間存在の身体的経験に結びつける「認知言語学」へと展開する。レイコフだけでなくラネカー（1942-）などのかつての生成意味論者や、そのほか、心理学者や哲学者なども加わって形成された認知言語学では、ことばが、文法との関係だけでなく、身体的経験や多様な心理過程との関係でとらえられ、その枠組みの中で、文学、政治的言説、日常的言語使用、そして文法において作用する修辭的過程が分析されるのである。

このようにして認知言語学は、チョムスキーの形式主義言語学の内部から現れて、ゲシュタルト心理学、プロトタイプ意味論、ファジー・ロジックなどと結びついて理論形成を行い、「ことば」と心を、文法と形式合理的思考の牢獄から解き放つことに貢献した。したがって認知言語学は、ハレやチョムスキーなどによって抑圧されたヤコブソンの記号論とは、直接的には連続していない。しかし、上述からも明らかなように、「ことば」を文法や合理的思考以上のものであると見なす点において、そして、ことばを、文化、宇宙観、認識、心理、行為、文芸などとの関係においてとらえている点において、認知言語学と記号論は通底している。

そして実際、史的系譜においても、両者の関連性は確認できる。上にみたように、レイコフが認知言語学へと至る道の途上には、ゲシュタルト心理学があった。この、人間の認識心理におけ

る「全体的構造」や「状況依存性」の重要性を説く、20世紀前期に中央ヨーロッパで起こった心理学の学派は、同時期に同じ場所で生じた思想——例えば、西南ドイツの新カント主義の哲学、フッサール（1859-1938）の現象学、心理哲学者カール・ビューラー（1879-1963）による指標野（index field; *Zeigfeld*）の言語理論、プラハ学派の構造主義言語学と文学理論——これらと強い親和性をもち、両者の間には人的交流も存在した。そしてヤコブソンは、ロシアでヘーゲルの「全体性」と「弁証法」の哲学を学んだ後にプラハに渡り、ウィーンへと移住した同志トゥルベツコイ（1890-1938）と共に構造主義プラハ学派に参加し、フッサール現象学へと接近したのである。その後、ナチスを逃れてアメリカに移り住んだヤコブソンは、ハーヴァードにたどりつき、そこでパースの記号論を発見する。（とくにヤコブソンが注目したのは、パースによる、類像 [icon]、指標 [index]、象徴 [symbol] という記号の3分類であり、これらは順に、類似的関係性、隣接的关系性、慣習的关系性に基づいて作用する記号様態を意味する。）そして、全体性と弁証法の哲学、心理学、言語学、文学、美学、文化論を統合できる、このパースの記号論の枠組みに基づいて、ヤコブソンは、ことばを、文法・論理、詩学、文芸、美学、行為論、出来事論、認識論にまたがるものとしてとらえる理論を築いていった。例えば、(a) 指標と (b) 類像という記号論の概念（上記参照）を使って、(1) 文法、(2) 修辞、(3) 文学、(4) 行為・出来事を横断的に分析して、(1 x a) 指示詞などの直示表現（ダイクシス）、連辞（シンタグム）、言説（ディスコース）と (1 x b) 擬音語擬態語・音義現象、パラダイム（範列）、タイプ・トークン関係、(2 x a) メトニミー（換喩）と (2 x b) メタファー（隠喩）、(3 x a) リアリズム小説と (3 x b) ロマン主義のポエジー、(4 x a) 場（コンテクスト）と (4 x b) 反復、テキスト生成など、さまざまな現象の相関を体系的に炙りだすことに成功したのである。

187

しかしヤコブソンが元来、ロシア未来派の前衛詩人であったこともあり、彼の記号論はとくに言語と詩学・文学との関係に集中して展開され、言語と文化・社会の関係や、言語と認識・心理の関係の記号論的探求は、後進に託されることになる。不幸なことに、上述したようにヤコブソンの記号論は、彼の多くの「言語学者」の弟子たちによっては理解されず、1960年代に一世を風靡したチョムスキーの生成文法の影に隠れてしまう。やがて生成文法の狭隘な枠組みが、生成意味論者たちによって突破され、認知言語学が登場し、ことばが再び文学や認識・心理との関係で語られだしたとき、認知言語学者たちの多くは、先行するヤコブソンたちの営為を、記号論を、忘却した世代に属していた。

だが、パースとヤコブソンが打ち立てた記号論の系譜が全く途絶えてしまったわけではない。ヤコブソンの多くの弟子たちのうちの幾人かは、記号論のプログラムの意義を正しく理解し、この伝統を継続し、発展させてきた。例えば、言語人類学では、デル・ハイムズ、ミルトン・シンガー、ポール・フリードリック、マイケル・シルヴァスティン、ビル・ハンクス、ジョン・ルーシーなどにより、記号論は、ことばと社会、文化、歴史、認識・心理を記述・分析する基礎理論として展開されている。とくに「指標性」（上記参照）は、今日の言語人類学にとって不可欠の鍵概念となっている。また、ヤコブソン晩年の弟子であったリンダ・ウォーや、あるいはジョン・ハイマンなどにより、ことばの「類像性」（上記参照）は体系的に扱われてきた。だが、今日まで、ことば、類像、メタファー、詩と認識・心理の関係は、体系的に分析されてはこなかったと言わざるをえない。

Metaphor and iconicity: A cognitive approach to analysing texts. メタファー、類像、認識・心理、そして詩的テキスト分析。ヤコブソンからウォーに引き継がれた類像性や韻文の記号論的分析を、認識・心理の問題系に直結するという課題に正面から取り組み、それを十全に展開してみせた功

績は、2005年に出版されたこの書のものである。ことばを文法や論理的思考に縛りつける狭隘な思考を拒否し、1980年代からヤコブソン記号論に基づいて精力的に詩の構造分析を行ってきた本書の著者、平賀は、ヤコブソン記号論を直接ウォーのもとでも学んだ学者である。のみならず、彼女は、1970年代以降、急速に発展してきた言語にかかわる諸科学、とくに語用論と認知言語学を自らの学問体系に取り入れ、ヤコブソン記号論に接合することに成功する。こうして、ヤコブソンからウォーへ、そして平賀へと引き継がれた類像性や詩の記号論的分析は、彼女の手によって、レイコフ、ジョンソン、ターナー、フォコニエなどの認知言語学、その認識・心理・メタファーの理論に接合され、ことばと認識・心理、類像、メタファー、詩の関係は、ここに初めて体系的に分析されるに至ったのである。チョムスキー形式主義言語学によって不幸にも分断されてしまったヤコブソン記号論と認知言語学との連関は、ここに回復された。

以上、本書のもつ歴史的意義を解明するため、近現代言語学説史、言語研究史においてこの研究書が占める位置を描きだそうと試みた。本書の具体的内容については、ぜひ、この書を実際に手にとって精読していただきたい。三部から構成されているこの書物は、第一部で、メタファー、類像、言語、認知モデルに関する統合的な理論的枠組みを示したうえで、その理論に基づいて、第二部で、具体的な詩や俳句の分析を展開し、第三部ではさらに、文法（統語）、談話（待遇表現）、そして書記言語（表意文字）の問題にまで射程を広げて論じている。第二部で示される、韻文の記号分析の手捌きには、他を寄せつけないほどのクラシカルな構成美があり、分析を通じて浮かび上がる図像の見事さには、ときに、圧倒的なものがある。そして第三部で展開される、記号論・認知言語学からの書記の分析は、近現代言語学の新たな地平を開くものであり、今後、さらに豊かな成果が期待される。次々と新たな領域へと進み行く、著者の精力的な学究活動には、驚嘆の想いを抱かざるをえない。

だがおそらく、本書がもつ美德のうち、最も豊かなもの、それは著者が長年にわたって保ち続けてきた、「ことば」と学問に対する姿勢にこそあるのではないか。つまり、文法や論理的思考だけにことばを幽閉してきた「言語学」という専門分野の領域を超えいでて、さまざまな領域にわたって広がることばの海へと進み出る勇氣、そして大海の中で荒波に揉まれながらも原理的に思考し続け、理論を再構築し、洗練し、発展し続けようとする。この時代、学際性や超領域性が叫ばれつつも、学知のさらなる細分化が進行し続けるこの時代に、ことばを文化やコミュニケーションとの関係においてとらえようとする「異文化コミュニケーション」の学徒にとって、このような著者の姿勢が力強い導きの糸となることは間違いない。

経験的な多様性を見失わずに、理論的な統合性を生みだすこと。20世紀という暗い時代の只中でヤコブソンの謳った学問の美しい理念が、私たちの時代においても希望の閃光を放ち続けるように。